

# 備前文明亂記

# 解題

備前文明亂記 一卷 著者 目黒祐欣

此書從來その著者を詳にせざるも、今回刊行の底本には、永祿元年三月九日目黒祐欣とありて、明かにその編著の年代と、その著者を知るを得たり。尙ほこの底本には、奥書に貞享三年十一月十日朝染筆とあれば、即ち今回刊行の底本は、貞享三年の書寫に係れるを知るべし。今之を既刊の史籍集覽本に對比するに、此書には、その奥書に「右作者不知如寫本 萬治三庚子二月下旬書之 常林坊判に、常林窓下染筆 江田宗眞老」とありて、即ち萬治三年に書寫せるものを、更に元祿九年に至りて書寫せしものなれば、もしこの轉寫の際改竄を加へたることなしとすれば、今回刊行の底本は結果に於て、史籍集覽本より二十七年の後に書寫せられたると同様なることを知る。

今兩書を取りてこれを對比するに、史籍集覽本はその文辭拙劣にして晦澁なるも、貞享本は簡潔にして流暢なれば、寧ろ史籍集覽本こそ原本に近きものといふべし。而して本輯には貞享本を執り、更に各項史籍集覽本を併べ掲げ、以つて彼此參照するの便に供へたり。

本書記する所、畠山義就の擧兵に始まり、赤松政則の備前入部となり、尋いで赤松・松田兩氏の確執となり、遂に文明十五年に至り松田氏は山名氏を誘ふて福岡城の包圍攻撃となり、その結果、赤松氏の勢力失墜し、松田氏これに代りて備前の覇權を握れる顛末を記せるものとす。従つて史籍集覽本には、その開卷第一に松田家歴代と、松田家の菩提寺たる妙國寺の歴代とを記せり。而してその奥書に見えたる常林坊日常の何人なるかは詳ならざるも、無論日蓮宗の僧侶にして、是等記事の竄入は、思ふに此人の手に成りしものか。

# 備前文明亂記目次

此目次及中見  
出とも本書底  
本には有之も  
史籍集覽に收  
めたる既刊本  
には共に無し

此表本書底本  
には無く刊本  
に在り

書出……………	(一)
島山右衛門佐義就舉兵事附山名細川合戦……………	(一)
赤松政則本領被返下事附山名政豊味方に參り諸國大名分散の事……………	(三)
松田左近將監元成背赤松政則事……………	(四)
福岡合戦の事……………	(五)
浦上紀三郎成敗檜村兄弟事……………	(九)
福井少次郎打死の事……………	(二二)
眞弓峠合戦の事……………	(二五)
小倉少四郎諫言の事……………	(二七)
於福岡藥師寺額田片岡討死申合の事……………	(二九)
福岡再度合戦の事……………	(三三)
浦上美作守則宗下向の事附雜說……………	(三五)

## 備前文明亂記目次終

金川城名 臥龍山

松田家代々

- 一、秀賢
- 二、秀巖
- 三、燈明
- 四、法泉
- 五、道林
- 六、源妙

- 七、妙善
- 八、妙國(元成)
- 九、皓日
- 十、蓮皓
- 十一、蓮盛於金川討死也
- 十二、蓮中於下田討死也

十三、淨榮(於備中須雲山討死)又俗名孫三郎。官名左近將監也。俗名官名共に代々如レ此。

金川日向山妙國寺代々住持三名

- 一、開山權少都日精(文明十二年草創歟)
- 二、日範
- 三、日悅
- 四、日審
- 五、日寶

- 六、日詮
- 七、日吏
- 八、日城
- 九、日欣
- 十、日航

私に曰、金川の地、今は左少將光政朝臣の臣、日置若狭知行所在居す。若狭食邑一萬六千石。

# 備前文明亂記

著者 目黒祐欣

\*既刊史籍集覽  
本には、著者  
氏名なく不明  
とせるも本書  
の底本には卷  
末に明に附記  
せるを以て今  
此に掲出す

夫れ我朝は神代の時去て、神武天皇東征して豊葦原を掌にし玉ひしより以來、帝朝より政出て目出度かりしが、後白河院の御宇、太政大臣平清盛跋扈して宸襟を惱し奉りし故に、源頼朝に勅して彼等を追討せしめ玉ひけり。其功を賞し玉ひて頼朝を總追捕使になされしより、いつとなく關東に勢ありて、叡慮のまゝにならぬ事のみぞ後には多くなりけり。後醍醐天皇の時、後鳥羽院の舊規を興さんと欲し玉へども、御成敗に應ぜず。猶以て東夷盛なる所に、元弘建武の比尊氏將軍相模入道平高時を滅し、其外新田左中將義貞の亂を治めて、天下泰平になりけり。

夫吾朝者神代時去、從ニ神武天皇以來、代々帝官ニ朝政給、後白河院御宇、太政大臣平清盛入道猥奉レ惱ニ宸襟ニ間蒙ニ勅命ニ右兵衛佐源頼朝、被ニ平氏一族悉追討ニ而任ニ惣追捕使、守ニ護國給共、有レ背ニ叡慮ニ雖、後鳥羽院後醍醐天皇起ニ舊規ニ思食、不レ應御成敗ニ尙以東夷盛所、足利尊氏卿元弘建武之比、責ニ亡相模入道始北條氏族其外新田左兵衛督義貞以下逆心給、一天泰平ナル處ニ

## 畠山右衛門佐義就舉兵事 附 山名細川合戰

夫れ惟るに、山名伊豆守子息右衛門督、其後陸奥、前司氏清の謀叛の事散じて、又應仁の比より天下亂れて禁裡仙洞を始奉り、月卿雲客諸國の士民に至るまで、一日片時も安き事なし。其由來を尋ぬるに、畠山左衛門督政長・同右衛門佐義就、家督相論に依て數度相戰ふといへども、右衛門佐義就上意に背くに依て、金胎寺嶽山合戰に懸負け、紀州の山林に籠居す。然りと雖、かの義就は弓箭を取て名をあらはす兵なりければ、山名右衛門督入道宗全連々不便の事に思ひける折節、右衛門佐義就より合力を頼む由ひそかに申遣す處に、宗全たやすく領掌して、文正二年但收元有て十二月二十五日、手勢一千八百餘騎を引率して上洛し、左衛門督政長を事故なく攻落し、威勢肩をなら應仁元年也

ぶる人もなし。

山名伊豆守時氏子息右衛門佐師氏、其後時氏四男山名陸奥前司氏清謀叛。又從應仁之比。天下一亂、奉始禰裏仙洞、至二月卿雲客諸國侍民百姓、无安事。尋其由來、依畠山左衛門督政長・同右衛門佐義就家督爭論、故也。雖每度相戰、依背右衛門佐上意、金胎寺嶽山合戰懸負、紀州山林籠居仕ル。然リト云ヘドモ、彼義就取弓矢、凡テ名ヲ顯ス兵多シ。山名右衛門督持豐入道宗全時氏四世孫也。連々義就が勇武ヲ惜ミ、山林籠居ヲ不便ノコトニ思フ折節、右衛門佐義就頻リニ宗全ニ合力ノコトヲ憑ム由竊ニ申送ル。依此持豐入道領掌シ、文政二年十二月廿五日、手勢一千八百餘騎ヲ引率シテ上洛シ、山名入道同心シテ事故ナク政長ヲ攻落シ、山名入道ガ威勢肩ヲナラフ人ナシ。

細川左京太夫勝元は、元來政長を最負たるにより、分國の勢を召のぼせ合戰に及ぶ事、まことに趙に二虎あるが如し。然る間、山名入道も勢を催す。山名同心の人々には、山名相模守・同修理太夫・同七郎・澁川治部大輔・一色修理太夫・佐々木六角・土岐美濃守・大内新助・河野伊豫守・畠山右衛門佐を始として、其外、宗徒の大名一味して、猛勢にて公方の御館をかこみける。然れども上意方には、先づ細川一門同意し、武衛松王・山名彈正忠・赤松兵部少輔・佐々木大膳大夫・武田大膳大夫・舍弟治部大夫畠山左衛門督は、一身にせまりたる事なれば云に不<sub>レ</sub>及、其外近習外様の諸士、いかなる遠國波島にかくれ居たる者共まで、此働大事に馳せ參らざるはなかりける。互に洛中に城郭して、既に十餘年に及で攻戰ふほどに、主上も室町殿へ臨幸ありしかば、禁中は兵士の陣屋となる。梶井殿・三寶院・妙法院・諸門跡・五山も、或は放火し、或は城郭となる。さる程に、年中行事の御政所聖壽萬歳の御祈禱も退轉し、諸社の神拜斷絶して飢饉年をかさね、災難月にます間、人々愁をいだかずと云事なし。さながら神道王法佛法ともに、破滅の世とぞ成りにける。かゝるためしは上古にも末代にも有べきやと、淺猿しかりし事ども也。

時ニ大樹ノ管領細川右京大夫勝元、元來政長最負タルニ依テ、勝元分國ノ勢ヲ召上セ、合戰ニ及ブコト度々也。實ニ趙ニ二虎アルガ如シ。然ル間山名入道同心ノ人々、先ッ山名相模守・同修理太夫・同七郎・澁川治部大輔・一色修理太夫・佐々木六角判官・土岐美濃前司・大内新助・河野伊豫守・畠山右衛門佐ヲ始トシテ、其外宗徒ノ大名一味大勢ニテ、公方ノ御營ヲ圍ミ申ス。將軍ノ御

方ニハ細川ノ一族不<sub>レ</sub>殘從ヒ奉ル。武將山名彈正忠ヲ招キ給フ。赤松兵部少輔・佐々木大膳大夫・武田大膳大夫・畠山左衛門督、各々勝元一味タリ。畠山左衛門督政長ハ身ヨリ起リタル大事ナレバ云ニ及バズ、其外ニ近習外様諸侍、如何ナル遠近波島ニ隱レ居タル者ドモマデ、此御大事ニ馳參ラザル者ハナカリケリ。互ニ洛中ニ城郭ヲ構ヘ、既ニ十餘年ニ及デ合戦タルユル間ナシ。是ニ依テ至上モ室町殿ヘ臨幸アリシカバ、則、禁中ハ武士ノ陣屋ト成リ、梶井殿・三寶院・妙法院、諸門跡、諸五山モ、或ハ放火或ハ城郭トナル上ハ、年中行事ノ御政所聖靈萬歲御祈禱モ退轉、諸社神拜斷絶、飢饉年重、災難月勝間、人々無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>懷<sub>レ</sub>愁、併佛法王法神道モ共ニ破滅ノ世ト成ニケル。懸ル有様ハ上古ニモ聞及バズ、淺マシカリシ事共ナリ。

### 赤松政則本領被返下事 附山名政豊味方參り諸國大名分散の事

今度文明の亂に上意方いづれも軍忠深厚なりといへども、取分け赤松兵部少輔政則軍忠他に異なるに依て、本國播磨備前美作三ヶ國を返し下さる。數十年牢浪せし諸士どもに本知行安堵せしめ、喜悅の眉を開き、彌々戦忠を致さんと勵ましける。然る處に山名入道宗全細川右京大夫勝元、兩人ともに病氣して死去す、それより後は今の山名右衛門督政豊、祖父の先非を悔て味方に參りけり。土岐佐々木は今出川殿を相具し奉り、美濃近江に下落す。大内新助政弘は山名修理大夫河野伊豫守を伴ひ西國に下りける。畠山兩人は河内國に馳下て、國争ときこえしかば、帝都は無爲に成にける。然といへども、東八ヶ國は重氏<sup>代カ</sup>上杉主従の合戦廿餘年やまず。筑紫は少貳と大内が争ひ、北は隱岐出雲因幡伯耆、南は四國中國五畿内の合戦なれば、いつ歸安すべきとも見えざりけり。

去程ニ、赤松兵部少輔軍忠ヲ抽ルコト、他ニ異ナルニ依テ、本國播磨備前美作三ヶ國ヲ返シ被<sub>レ</sub>下、十ヶ年牢浪セシ諸士ドモ、本知行安堵シテ喜悅ノ眉ヲ開キ、彌忠戰ヲ致シケル。然ル處ニ、山名入道宗全細川右京大夫兩人、共ニ病氣ニシテ軍中ニ死去シ、兎角ノ内ニ談合共出來テ、今ノ山名右衛門督政豊、父祖ノ先非ヲ悔テ將軍家ノ御味方ニ馳參ジ、土岐佐々木ハ今出川殿ヲ相具シ奉リ、美濃近江ニ下向シ、大内新助ハ、山名修理大夫河野伊豫守ヲ伴ヒ西國ニ下、畠山兩人河内國ニ馳下、國諍トゾ成ニケル。帝都ハ無爲ニ成ニケリ。然リト云ヘドモ東八ヶ國ハ、重代上杉主従ノ合戦二十餘ヶ年也。筑紫ハ少貳ト大内ガ諍、北ハ隱岐出雲

因幡伯耆、南ハ四國中國五畿内ノ合戰共、何歸伏ス可トモ見エザリケリ。

### 松田左近將監元成背赤松政則事

備前の國は、今度の一亂以前は山名相模守知行し、小鴨大和守を代官として在國し、城郭を構へ居たりしを、勝元計略に依て、松田左近將監一族若黨を相催し押寄る處に、赤松郎等ども多年の遺恨を散ぜん、彼に與力し攻落す間、本國たるに依つて守護職政則知行仕る。軍功の賞として、伊福の郷と云處一ヶ所松田將監元成にあたへ置く所に、天下亂たる時節たるに依て、松田一族ども備前の國西郡の内數ヶ所押領す。國方の本給人ども野心を含み、便宜をうかゞひ此事を訴訟し、時刻あらばと相待つ處に、山名右衛門督政豐、三ヶ國を召放し、赤松に返し下さるゝを野心にふくみ、文明十一年九月上旬、上意をうかゞひ但馬國に馳下る。赤松兵部少輔も同十一月二十一日播磨國に下向し、此次でを以て備前國松田押領の在處どもを改易すべき由風聞す。元成此由を聞て、押領の在所は忿劇の間、一旦兵糧料所として一族等抱え置處、糺返すべき條勿論の義也。伊福の郷に於ては、軍の功賞たる上は、異變はあるまじき事なるに無念至極の事也。只事を左右によせて我等を攻失ふべき企て顯然たり。其義ならば力不及とも一合戰して討死すべきとて、元成館金川と云處に要害をかまへける。

去程ニ、備前國ハ今度一亂以前ハ山名相模守知行シ、小鴨大和守爲ニ代官ニ在國シ城郭ヲ構ヘ居タリ。然ラ勝元計略ニ依テ、松田左近將監一族若黨ヲ相催シ押寄ケルニ所ニ、赤松家ノ侍ドモ多年ノ遺恨ヲ散ジ、與力ヲシテ彼城ヲ責落ス間、本國タルニ依テ守護職政則知行仕リ、軍功ノ賞トシテ伊福郷ト云所ヲ一所、松田左近將監元成ニ出置所ニ、天下大亂ノ時節タルニ依テ、松田一族共備前國西郡ノ内數ヶ所押領ス。是ニ依テ國中ノ本給人ドモ大ニ野心ヲ含ミ、便宜ヲ伺ヒ此事ヲ訴訟シ、時節アラバト相待處ニ、山名右衛門督政豐三ヶ國ヲ召放サレ、赤松ニ返シ被レ下事ヲ怒リ野心ヲ起シ、文明十年九月上旬、上意ヲ伺ハズ但馬へ馳下リ軍勢ヲ集ル間、赤松兵部少輔モ同十月二十一日播磨國へ下向シ、此次テヲ以テ、備前國松田將監ガ押領スル在所ドモ改易スベキ由風聞ス。元成此事ヲ傳ヘ聞テ、押領ノ在所ハ忿劇ノ間、一旦兵糧料所斷所ノ爲ニ一族等抱置所、可ニ糺返ス條勿論ノ義也。於ニ

伊福郷一者軍功ノ當タル上ハ、異變ノ段无念至極也。畢竟事ヲ左右ニ寄テ我等一族可ニ責失ニ企現形セリ。其儀ナラバ力不<sub>レ</sub>及<sub>トモ</sub>一合戰シテ可ニ討死<sub>ト</sub>テ、元成ノ館金川ト云所ニ要害ヲゾ構ヘケル(私ニ云フ、金川ハ今日置若狹守在所ナリ。若狹守ハ當國主左近少將池田光政ノ臣ナリ)。

されば彼山は麓に大河流れ、嶺高くして雲つらなり。谷深くして磐石そびえ廻り、四方嶮岨なる事屏風の如し。西は備中國境、北は美作につぎきたるゆゑ、百丈切たる峰の上に堀を付け櫓を上げ、中には陣屋打ならべ、國方のはたらしき相待けるが、かくて猛勢を引請けん事計略なきに似たりとて、安藝の國嚴島一見と號して、歩行のよそほひにて備後國に下り、山名又次郎俊豊に申けるは、御分國ども今度一亂中、赤松に返し玉ふ事は非なき次第也。所詮思召立てたまはゞ、備前の國をば切開き進すべき由、事もなげに申ける。望は多年の事なれば、一往の思案に不<sub>レ</sub>及<sub>トモ</sub>軍の内談ども申合せ、備前の國へぞ返りける。

サレバ、彼山ハ麓ニ大河流レ、嶺高ク雲連リ、谷深ク磐石峙チ廻リ、四方岨岨ナル事屏風ヲ立テタル如シ。西ハ備中境、北ハ美作ニ續タル數百丈切タル岸ノ上ニ屏ヲ付ケ、櫓ヲアゲ、中ニハ陣屋ヲ打ナラベ、國方ノ働ヲ相待ケルガ、角テ猛勢ヲ引請ン事計略ナキニ似タリトテ、安藝國嚴島一見ト號シテ、歩行ノ程ニテ備後國ニ下リ、山名又次郎俊豊ニ申シケルハ、御分國ドモ今度一亂中赤松ニ返シ給フ事無<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>次第ニ候。所詮急度思召立御取返シアルニ於テハ、備前ノ國ノ事ハ我等切開キ可<sub>レ</sub>進ノ由、事モナゲニ申間、俊豊モ元來備前國ハ望也。一往ノ思案ニモ及バズ頓テ領掌アリ、軍ノ内談モ申合セテ松田ヲバ備前國ニゾ歸シケル。

## 福岡合戦の事

去程に赤松政則は、備前の國に打越え彼の在々所々を廻り、押を置き給人をつけ玉ひ畢りぬ。然る間、松田は兼て覺悟の事なれば、但馬備後へ飛脚の行き歸るほどこそあれ、文明十五年九月二十五日に、山名又次郎俊豊備後尾ノ道ヲ打立、分國の國分寺に着陣し、分國他國の勢ども相催す間、俊豊に相從ふ兵には、先當國守護代大田垣美作入道。

\*「原本註一  
イに太郎

\*「原本註一  
イに左馬允

\*「此所人名猶  
研究を要す

\*「別本には「同  
國」を分國」とす

\*「此所猶研究  
を要す前掲別  
本及び後年の  
著作たる備前  
守記には備前  
守とせり

\*「原本註一に三  
方

舍弟<sup>河内イ</sup>三河守・同新右衛門尉・同左京亮・三吉<sup>※</sup>太兵衛・同和泉守・杉原三郎・木梨遠江守・本郷藤左衛門・山内新右衛門・同下野守・多賀新兵衛尉・滑良<sup>なから</sup>兵庫助・同四郎太郎<sup>三河内河内守</sup>・金谷<sup>かなや</sup>山城守・花栗播磨守・湯河備中守・鍛冶屋五郎左衛門・和氣筑前守・安田掃部亮・小越<sup>こごし</sup>彈正左衛門・由谷<sup>ゆや</sup>加賀守・江田新藏人佐・同與三左衛門尉・涌喜<sup>ゆき</sup>上野守・敷名<sup>しきな</sup>備中守・下見小三郎・栗原刑部左衛門尉・吉原藤左衛門・田房左馬助<sup>うへのやま</sup>・上山出雲守・板倉新左衛門・安藝國には、小早河・草井和泉守・竹原<sup>※二本ノ</sup>・則光備中守・毛利太郎・赤河和泉守・出雲國には馬來惣兵衛尉、伯耆國には小鴨次郎四郎・同掃部亮、石見國には周布・福屋、其外隣國の諸士どもも駈付けるほどに、都合其勢三千餘騎、十一月七日備前の國に押寄る。

案ノ如ク幾程モナク、政則備前ニ打越シ彼在々所々ヲ悉ク押置キ、給人ヲ付タリ。兼テヨリ思儲シ事ナレバ、但馬備後ノ兩國ヘ飛脚ノ往還スル程コソアレ、文明十五年九月二十六日ニ、山名又次郎俊豊備後尾道ヲ打立、同國ノ國分寺ニ着陣シ、分國他國ノ勢ヲ相催ス間、俊豊催促ニ隣フ輩ニハ、先當國ノ守護代太田垣美作入道・舍弟河内・同新右衛門尉・同右京亮・三吉太郎・同和泉守・杉原三郎・木梨遠江守・本郷藤左衛門・山内新左衛門尉・同下野守・多賀新兵衛尉・滑良兵庫助・同四郎太郎・三河内河内守・金谷山城守・花栗播磨守・湯川備中守・鍛冶屋五郎左衛門・和氣筑前守・安田掃部頭・小越彈正左衛門・由谷加賀守・江田新藏人・同與三左衛門尉・涌喜上野介・敷名備中守・下見三郎・栗原刑部左衛門尉・吉原藤左衛門尉・田尻<sup>つり</sup>左馬亮・上之山出雲守・板倉新左衛門・安藝國ニハ小早川・草井和泉守・竹原則光、備中國ニハ毛利太郎・赤川和泉守、出雲國ニハ馬木惣兵衛尉、伯耆國ニハ小鴨次郎四郎・同掃部助、石見國ニハ周布・福屋、其外隣國ノ諸侍モ馳付ケル程ニ、都合其勢三千餘騎、十一月七日ニ備前國ニ押寄ル。

兼て相圖の事なれば、松田一黨には左近將監元成・子息孫次郎元勝・元成の舍弟惣右衛門・其弟花光院・宮内備前守・鹿田<sup>かした</sup>備前守・同掃部亮・子息次郎・同大炊助・同駿河守・子息民部大輔・同修理亮・同孫四郎・同參河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮・佐藤式部、其外家來若黨一千八百餘騎、備中國には上野土佐守・同豊前守・同三河守・同肥前守・庄ノ伊豆守・子息四郎次郎・多氣<sup>たけ</sup>・河面<sup>かほ</sup>・小坂・河西・高木・東條、都合其勢一千三百餘騎、松田勢一手に成て福岡西より北の山に陣を取る。備後勢同く南津坂<sup>なつ</sup>の上火鉢が城に陣を取る、大方<sup>※</sup>味方は大山五六十九も陣を取りつゞけ、

大幕打廻したる陣の體、たとへん方なし。彼の福岡の城と申は、北より東西に大河流れ、河島に小山あり。彼山を本城とし、其西に堀をほり、塀をぬり、年來調置處に、今度は敵身方猛勢たる間、要害を仕出さんと、在家一千餘家かまへの中に仕籠て、始て河水をほり流し、其中に大堀を二重三重にかまへ、塀をかけ、河瀬には亂杭逆茂木引櫓井樓あげたれば、三方は大河なり、誠に異國の漢陽宮の鐵の築地は、雁門の開きたれば鳥の通ふと聞えたり。是は雁門のひらかれざれば、飛鳥もかけりがたし。

兼ア合圖ナレバ、松田ノ一族ニハ、左近將監元成・子息孫次郎元勝・左近將監ノ舍弟宗右衛門尉・其弟花光院・宮内備前守藤山備前守・同掃部助・子息次郎・同大炊助・同騷河守・子息民部大輔・同修理亮・同孫四郎・同三河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮・佐藤式部丞、其外家ノ子若黨一千八百餘騎、備前國ニハ上野土佐守・同備前守・同三河守・同備前守・庄伊豆守・子息四郎次郎・多氣・川面・小坂・川西・高木・東條都合其勢一千三百餘騎也。松田勢一手ニ成テ、福岡ノ西ヨリ北ノ山ニ陣取り、備後ノ勢同南津坂ノ上火鉢ガ城ニ陣取り、大方三方大山五六十九トモ陣取り續ケ、大幕ヲ打廻シタル陣々ノ在様譬ヘン方モナシ。彼福岡ノ城ト申ハ、東西ニ大川流廻ル川島小ガ少山アリ。彼山ヲ本城ニシテ、其面ニ堀ヲ掘リ、屏ヲ塗リ、年來調置處ニ、今度ハ敵味方猛勢タルノ要害ヲ仕出サントテ、在家一千餘ヲ構中ニ仕籠、初テ河水ヲ掘流シ、其中大堀ヲ二重三重ニ掘、屏ヲ塗、川瀬ニハ亂杭逆茂木ヲ引、櫓井樓ヲ揚グレバ、三方ハ大河也。誠ニ異國ノ咸陽宮ノ鐵築地ハ、雁門開キタレバ鳥通ナリ。是ハ雁門ノ不レ開バ、飛鳥モ難レ翔見エタリケル。

城中には守護代として浦上紀三郎・同伯耆守・子息六郎次郎・舍弟豊前守・其弟與三左衛門・同若狭守・同次郎右衛門・同彌三郎・同八郎太郎・喜多孫左衛門・同掃部亮・櫛橋豊後守・同彌五郎・藥師寺四郎左衛門・同山城守・同次郎左衛門・舍弟延命寺・同六郎左衛門・同小六・難波掃部亮・舍弟十郎兵衛・同四郎左衛門・同八郎次郎・山田平左衛門・同四郎左衛門・有松右京進・同與七・同彦九・雲懸伊賀守・岡本筑後守・同孫次郎・津島修理亮・同三郎左衛門・小串藤左衛門・中村次郎右衛門・大島縫殿助・沼田與市・同與五郎・延原八郎左衛門・山守八郎左衛門・兒島太郎左衛門・内藤藤左衛門・同與左衛門・市村隼人佐・足立あだち新三郎・藤田新兵衛・志方彌六・同藤兵衛・横山助五郎・青津九郎左衛門・矢田

次郎左衛門・伏見藤左衛門・本郷彌九郎・片岡孫左衛門・額田十郎左衛門・彌延九郎左衛門・子息新九郎・大村八郎三郎・國富太郎次郎・榎所彈正左衛門・目黒新右衛門・桑島兵庫助・中村三郎兵衛・其外備前播磨の軍兵ども都合二千餘騎にて楯籠る。彼大河上の瀬は長船右京亮・同左京進・新田・香々登の野伏を相添へ陣取る。下の瀬の津坂口は五ヶ所六ヶ郷の野伏共堅めけり。河より東へ敵を渡さじとひしぎ支へなみ居たりしは、竹葦のごとくに見えたりける。寄手は猛勢なりと云へども、徒に幕の内に詩歌酒宴に休息し、城郭のありさまを餘所にのみ見てやみなんと、數日をこそは送りけれ。

\*難波八郎次郎  
山田平左衛門  
同四郎左衛門  
及内藤左衛門  
門脱カ

城中ニハ、守護代浦上喜三郎・同伯耆守・子息六郎次郎・基景ノ舍弟豊前守・其弟與三左衛門・同若狭守・同次郎右衛門・同彌三郎・同八郎太郎・喜多野孫左衛門・同掃部助・榎橋豊後守・同彌五郎・藥師寺四郎左衛門・同山城守・同次郎左衛門・舍弟延命寺・同六郎左衛門・同小六・難波掃部助・舍弟十郎兵衛・同四郎左衛門・有松右京亮・同與七・同彦八・裳懸伊賀守・是本筑後守・同孫次郎・津島修理亮・同三郎左衛門・小串藤左衛門・中村次郎右衛門・大島縫殿助・沼田與市・同與一郎・延原八郎左衛門・山守八郎左衛門・兒島太郎左衛門・内藤與左衛門・市村隼人佐・足立新三郎・藤田新兵衛・志方彌六・同藤兵衛・横山助五郎・官津九郎左衛門・矢田次郎左衛門・伏見藤左衛門・本江彌九郎・片岡孫左衛門・額田十郎左衛門・彌延九郎左衛門・子息新九郎・大工村八郎三郎・國富太郎次郎・榎所彈正左衛門・目黒新右衛門・桑島兵庫助・中村三郎兵衛・其外備前播磨ノ軍兵都合二千餘騎ニテ楯籠ル。彼大川上瀬ハ長船右京亮・同左京進・新田・香々登・野伏ヲ相副ヘ陣取り、下ノ瀬津坂口ヲバ五ヶ庄六ヶ郷ノ野伏堅メテ、河ヨリ東ヘ敵ヲ渡ラセジト支ヘケル間、寄手猛勢タリト云ヘドモ、徒ニ帷幕ノ中ニ休息シテ餘所ニミ見テチャヤミナン。葛城ノ山陣ニ詭歌酒宴ニ戯レテ數日ヲ送リケル。

かゝりける所に、十一月二十二日拂曉に山名の勢打出て、誰を先手としらねども、猛勢一度にどつとをめき、先陣河原に打のぞめば、後陣は福岡の原に充滿せり。幾千萬とも見えざるが上は坂屋が瀬、下は石津が瀬の間、淵とも瀬ともいはずして打いでく渡しける。東向の勢ども且相戦と云へ共、雲霞のごとくの猛勢に散々に切立られ、手負死人ありしかば、引退間、長船が館に發向し、近邊の民屋一字も不殘焼拂ひ、頓て取返し河より西に打歸り、津坂口

の瀬を渡す。野伏ども河岸に臨み防戦せしかども、數百人討れて互に陣を引て入り、寄手は山に引あがり勝鬨あけて居たりしは、目にあまりたる大勢なれば、城中の人々も臆しつべくぞ見えにける。

懸ル所ニ、十一月二十二日拂曉ニ山名ノ勢打出ツ。先陣ハ河原西ニ打蒞ミ、後陣ハ福岡ノ原ニ充滿シタル勢ハ、幾千萬トモ見分ザリケリ。上ハ板屋ケ瀬下石津瀬ノ間、淵トモ瀬トモ不レ云打出渡シケル間、東向ノ勢モ支ヘテ且相戰ト云ヘドモ、雲霞ノ如クノ勢ニ切立ラレ、手負死人アリシカバ引退ニケリ。依レ此長船ノ館ニ發向シ、近邊ノ民屋一字モ不レ殘燒拂ヒ、頓取テ返シ、川ヨリ西ニ打歸リ、津坂口ノ瀬ヲ渡リ、野伏モ川岸ニ蒞テ防戦セシカドモ、數百人討レ即時ニ破レニケリ。然リト云ヘドモ、河東ニ陣ヲバ取ラデ元ノ山陣ニ打登リ、凱歌ヲ揚ゲテ居タリシハ、目ニアマル大勢也。城ノ中ニモ臆スベシトゾ見エニケル。

### 浦上紀三郎成敗井村兄弟の事

去る間山陣には大息ついで休みけるが、松田將監元成つらくことを思案して、一族を召あつめ、山名等に對話して神妙に申されけるは、今一攻せめたらば、味方利運になりなんは案の前の事なれども、多くの軍兵討死して何の益かあらんずらん。一人もうたせずして智謀を以て落すべしと、案をめぐらしけるやうは、元成が若黨に檜村といふ者あり。彼が兄にてありける檜村與三兵衛・同又次郎とて、浦上紀三郎に奉公してありける間、此ちなみを以てしのびやかにすかしけるは、城中に火をかけ浦上を討取て降參せば、過分の恩賞行ふべしと事たゞしく云ひきかせ、金銀過分にあたへける間、則領掌して厚恩の主を討たんとたくみしは、淺猿かりし心中なり。されば十一月二十三日の夜大風木を折て吹ける間、定てしのび夜討やあるべしと、宿直夜廻りさせ番きびしく仕けるに、いづくの隙にか付けたりけん、城中の陣屋やき出たり。大風にはなつ火矢天にみだれ、五町三町餘の所に猛火飛散て燒上る。つくりつゞけたる陣屋なれば、いかにして燒とどまるべくとも見えざりける。本より相圖を定めしことなれば、山陣の勢下り立ち、手火續松は青天の星の影よりしげく、上下四五萬もあらんと思ふ軍勢堀を埋めよせ、持楯昇楯かつぎつれ、をめきさけんで身命をすて、攻めければ、鯨波地を動かし、狼煙天にかゞやきしは、誠には有頂天、下は阿鼻

大城まで滅すべうぞ覺えける。されば如何なる天魔鬼神も面をむくべきやうぞなき。

然ル所ニ、浦上紀三郎ガ若黨檜村與三兵衛、向又四郎トテ、一人松田ニ奉公ス。此縁ヲ以テ檜村兄弟ヲ語ラヒ。城ニ火ヲ掛ケ浦上喜三郎則國ヲ打取り降參セバ、過分ノ恩賞ヲ可<sup>知カ</sup>行由申聞セ、若干ノ金銀ヲ與ヘケル。依<sup>レ</sup>之則領掌シテ正シキ厚恩ノ主人ヲ討タント規ヒシハ、淺マシカリシ事共ナリ。然ル所ニ十一月二十三日夜大風木ヲ折リテ吹ケル間、定メテ忍ビ夜討ナンドモ可<sup>レ</sup>有トテ、宿直夜廻ヲ構ヘ番キビシクシケルニ、何ノ隙ニカ付タリケン、城中ノ陣屋焼出タリ。大風ニ放ツ火天ニ燃亂レ、五町三町餘所々猛火飛散シ燒上ル。作續ケタル陣屋ナレバ、何ニシテ燒止ルベシトモ見エザリケル。元來ヨリ合圖ヲ定メシ事ナレバ、山陣ノ勢下立チ、手火續松ハ晴天ノ星ノ影ヨリ猶繁ク、上下四五萬人モアルラント思フ軍勢、堀ヲ埋寄セ持楯階楯カツツレ、ヲメキ叫ンデ身命ヲ捨テ責ケレバ、鯨波地ヲ動シ狼煙天ヲ耀セシハ、誠ニ上ハ有頂天、下ハ阿鼻大城モ即時ニ破滅スルカヤトゾ覺エシ。サレバ如何ナル天魔鬼神モ、面ヲ可<sup>レ</sup>向トハ見エザリケリ。

然といへ共城中の勢一騎當千の者どもなれば、少も是をことゝもせず、思ひく<sup>レ</sup>に備の口に相支へ防戦ひ、精兵共櫓より指詰引詰さんく<sup>レ</sup>に射立る矢叫の聲、互に切合ふ太刀音、天地も響く計り也。松田巧をめぐらして智謀なりとは申せども、檜村が無道にて天にそむける其謂<sup>いはれ</sup>にやありけん、寄手若干手を負、引足になる所、浦上與三左衛門子息與三を始として、城戸を開て切て出て散々に追立けるほどに、みな本の山陣に引退ける。檜村心をめぐらして則國を討んとて、こゝやかしこにてねらへ共たばかり損じ、さらぬ體にて居たりしが、すでに其夜も明ければいかなる者の仕業ならんと、人々あやしみあへる所に、檜村方下人ひそかに申けるは、夜前の放火はたのみたる人の仕業なりと、巧みしことの始め終り一々次第に語りける。則國これを聞よりも、彼兄弟の者共をひた<sup>レ</sup>と搦捕り、思ふさまに拷問し、白狀歴然の事なれば終に誅をぞしたりける。されば因果經に欲<sup>知</sup>未來果<sup>見</sup>其現在<sup>因</sup>と説けり。かくのごとく、主を討んとたくみし下人にうらなはれしこと、世は澆季に及といへ共、日月は落ちず。いかでか臣として君をおかさんものやある。禮儀をしるべき道なるに、檜村振廻を城中の人ごとに、にくまぬものはなかりけり。

然リト云ドモ城中ノ兵ドモ一騎當千ナリケレバ、是ヲ少モ事トセズ思構ヘテロ々ヲ相支ヘ防戦シ、精兵櫓ヨリ指詰引詰散々ニ射、石弓叻切ニテ打ツ音矢叫、天地モ響クバカリナリ。是ニ依テ奇手若干手負死人射出サレ、引足ニ成ル處ヲ門ヲ開キ切テ出、散々ニ戦フ間、本ノ山陣ニ退ク。然ル間則國ヲ討ント、爰彼ニテ覘ヒケレドモ擊損ジ、サラヌ體ニテ居タリシニ、夜モ明ケレバ如何ナル者ノ所爲ナラント、人々アヤシミアヘリケル處ニ、檜村與三兵衛ガ下人密ニ申シケルハ、夜前ノ火事ハ頼ミタル與三兵衛ガ讒ノ由、始ヨリノ巧ノ發リドモヲ一々次第ニ告知ラセケル間、是非ナク檜村兄弟ヲ搦拷問スル處ニ、白狀歴然タリ。是ニヨリテ終ニ彼兄弟ヲ斬戮ス。サレバ法華ニハ、諸苦諸因貪欲本ト説レテ、諸ノ苦ハ貪欲ヲ本トシ、因果經ニハ欲知過去因見其現在果、欲知未來果見其現在因ト説テ、現在ノ果ヲ見テ過去未來ヲ知ルトコソ見エタレ。忽ニ如此重恩ノ主人ヲ討ント巧ム事己ガ僕ニ告ラレシハ、世ハ堯季ニ及ブト云ヘドモ日月未<sub>レ</sub>落地、爭カ爲<sub>レ</sub>臣犯<sub>レ</sub>君乎、禮儀ヲ可<sub>レ</sub>知道トコソ見エタレ。

### 福井少次郎打死の事

すでに山陣の人々は、夜前大火に城落て浦上紀三郎を討すまし、檜村見參に入べしと思ひしに、案の外城中には事ともせず。檜村成敗の由聞つたへ、如何すべきと内談しけるが、庄野伊豆守申けるは、味方は山上に陣をとり城を目の下に見おろし、手の内ノ敵どもを攻落さで、徒に日を送る事の無念さよ、一合戦して雌雄を決すべきとて、十二月十三日伊豆守手の者ども、足輕野伏の體にて三百人計り、富岡といふ小山の北の陰より打出たり。浦上紀三郎が若黨ども是を見て、定て城をせめられんと此頃相待所に、今日まで甲斐々々しく合戦をもせぬことよと安からず思ひしかば、敵打て出る間、城より出合一矢射違ふる程こそあれ、切掛々々散々に戦ふ。寄手には細屋七郎右衛門白賀新兵衛討死し、城方には岸野五郎左衛門うたれて相引に引退く所に、庄右衛門是を見て、手勢五百人計にて富岡山の南の端より打て出る。城中より櫛橋彌五郎・岩間孫四郎・難波十郎兵衛・沼田與市・延原八郎左衛門など始として、大勢切て出る。是を見て庄野伊豆守元資、法成寺掃部亮を使にて申けるは、同名右衛門四郎若武者にて楚忽の打死を仕るべし。合戦といふは味方を見繕ひ、時節をはからひ敵を亡すを以て勇士とは云ふなれ。只討死して敵に利

を付るを能とはせず、屹度伴ひ歸れと云ひければ、馳向て此由を云ふに、右衛門四郎曰く、侍が戰場に出で、敵に後を見するやうやある。一足も引まじい物をと匄て、楯より面に進出で、二間渡りの鎗を取直し、備中の國の住人庄ノ右衛門四郎と云ふ者ぞ。よれ手次の程を見せんと云ふ。沼田與市・岩間孫四郎・目黒次郎左衛門・弟與一左衛門渡合ひ、散々に戦ふ。目黒次郎左衛門驕當を突れ、與一左衛門弓手の肩を突れながら、右衛門四郎を打取にけり。

去程ニ寄手ノ勢城ヲ見下シ、目前ノ敵ヲ攻落サデ徒ニ日ヲ送ランハ無念ノ次第ナリ。一合戦シテ可決雌雄トテ、十二月十三日庄伊豆守手ノ者ドモ、足輕野伏ノ體ニテ三百人バカリ、富岡ト云フ小山ノ北ノ陰ヨリ打出タリ。浦上喜三郎若黨ドモ是ヲ見テ、定テ城責ラレント相待ツ處ニ、今日迄甲斐々々シキ合戦セザル事ヲ不安思ヒシカバ、敵打出間、城ヨリ出合一矢射違フル程コツアレ、切テ懸リ散々ニ相戦フ。寄手ニハ細矢七郎右衛門・白賀新兵衛討死シ、城方ニハ岸野五郎左衛門討レテ相曳ニ引退所ニ、庄右衛門四郎是ヲ見テ、手勢五百人計ニテ富岡ノ南ノ詰ヨリ打テ出ル。城中ヨリ櫛橋彌五郎・岩間孫四郎・難波十郎兵衛・沼田與市・延原八郎左衛門ナンドヲ始トシテ、大勢切テ出ル。是ヲ見テ庄伊豆守元資法城寺掃部助ヲ使者ニテ申ケルハ、同名右衛門四郎若武者ニテ楚忽ノ死ヲモ仕ルベシ。合戦ノ道ハ敵味方ヲ合セ、時節ヲ計テ敵ヲ討亡スヲ勇士トハ申スナリ。只討死シテ敵ニ利ヲ付ルヲ古來ヨリ大將ノ心トセズ。急度伴ヒ歸ルベシト云ケレバ、掃部助急ギ馬ヲ馳テ此由ヲ云フ。右衛門四郎此旨ヲ聞テ勇士ノナラヒ戰場ニ苟モ後ヲ見スル様ヤアル、一足モ引ズ討死スベシト言ツテ、楯ヨリ面ニ進ミ出テ二間渡ノ長槍ヲ取直シ、備中國住人庄右衛門四郎ト云フ者ナリ。手並ノ程ヲ見スベシト大言ス。沼田與一・岩間孫四郎・目黒次郎左衛門・弟與一左衛門渡シ合セ、散々ニ戦ヒ、目黒次郎左衛門驕當ヲ被突、與一左衛門右手ノ肩ヲ被突ナガラ右衛門ヲ討テケリ。

法成寺は右衛門四郎を呼返さんとするに、かへらで討死する間、散々に戦ひ延原に討れにけり。福屋藤次郎延原彦八と渡合ひ、太刀をすて、むすどくみ、福屋を取ておさへ刀を抜て内甲胸板はづれを二刀さす。さゝして福屋云ひけるは、石見の國の住人福屋藤四郎と云ふ者ぞ、一足も引ず討死したりと云ひつたへてくれよとて、終に首をぞとらせける。かやうに敵味方亂れ合ひ、追つ返しつ散々に戦ひ引退く所に、城中の若武者ども兩度合戦に逢はざるを無念にや思ひけん、城戸を押開き堀橋を渡て二千人計颯と出る所に、備後勢松田勢庄伊豆守を始として東西より

真中に取籠、一人もあまさじと切先をそろへて、えいや聲にて雲霞の如く切てかゝる間、浦上伯耆守大音聲にて申けるは、城郭をかまふるは敵を引懸利をせんための謀也。廣場に出合は勇士の短慮ぞ、構に入て敵を射よとよばはりける間、げにもとて次第々々に引退く所に、あまりに手しげく追懸るほどに取て返しさんぐくに戦ひ、彌延九郎左衛門・井原孫左衛門・内藤四郎兵衛・福井少次郎、其外浦上紀三郎・同伯耆守が若黨共七十餘騎討れにけり。

延原左京進本ノマ、法成寺掃部助・右衛門四郎ヲ呼返サントスルニ、右衛門同心セズ猶深入シテ討死スル間、掃部助モ散々ニ戦ヒケルガ、延原ニ討レテケリ。福屋藤次郎ハ延原彦八ト渡シ合セ、太刀ヲ捨テ無手ト組テ福屋ヲ取テ押へ、刀ヲ抜テ内背胸板外ヲ二刀指ス時、石見國住人福屋藤四郎ト云者ゾ、一足ヲ引ズ即討死シタリト云傳テクレヨト云テ、終ニ首ヲ被レ取ニケリ。ケ様ニ、敵味方入亂レ追ツ返シツ散々ニ戦ヒ引退ク所ニ、城中ノ若武者共兩度ノ合戦ニ不合事ヲ無念ニ思ヒ、木戸ヲ開キ堀橋ヲ渡ツテ、二千人許颯ト出ル處ニ、備後ノ勢松田勢庄伊豆守ヲ始トシテ、東西ヨリ真中ニ取籠一人モアマサジト鋒ヲ揃へ、曳々聲ヲ出シ雲霞ノ如ク切テカ、ル間、浦上伯耆守大音聲ニテ申シケルハ、城郭ヲ捲フハ敵ヲ引懸テ利ヲ待ベキ謀ナリ。平出合ハ無勇士ノ至リ、構ニ入テ射殺セト喚リケル間、實ニモトテ次第々々ニ引退所ニ、敵手繁ク追懸ケル間、取テ返シ散々ニ戦テ、彌延九郎左衛門・井原孫左衛門・内藤四郎兵衛・福井少次郎、其外浦上喜三郎・同伯耆守若黨トモ七十餘人討レニケリ。

浦上彌三郎返し合ひくさんぐくに戦ひ、數ヶ所疵を蒙り、其外淺手深手はしらす疵をおふ者何百人かありけん、記するにいとまあらず。取分あはれをとゞめしは福井少次郎なり。かれは都の者なりしが、幼少四歳の時、父源左衛門在國する程に下向し、當年二十一歳になる迄母不斷對面せず。今日の合戦に父と一所に出んと思ひしが、餘り手ひどく戦ふ間に父源左衛門を見失ひ、城の中に入けんと城中に懸入て、戦散して益なし、軍は今が肝要なり出させ給へ源左衛門殿と、呼はりみれども見えざれば、又戰場にや有けんと二度大勢の中へ切て入り、福井少次郎生年二十一歳と名乗かけ、いきほひつよく見えければ、向敵も引退互に城に引けるが、數ヶ所の疵をかふむりてつかれはてたる少次郎、伏ころび居たりけるを、父源左衛門是を見付て、いかに少次郎々々と呼ども、淺手深手に一十六ヶ所手を負ひ、終に空しく成にけり。

浦上彌三郎返シ合セ、散々ニ戦ヒ數ヶ所疵ヲ被ル。其外深手淺手ヲ被ル者敵味方何百人カ有ケン、不レ違レ記。取分中ニモアハレナリシハ福井少次郎ナリ。彼ハ都ノ者ナリシガ、四歳ノトキ父源左衛門在國スル程ニ父ト共ニ下國シ、當年二十一歳ニナルマデ母ニ對面スルコトヲ不レ得。然ルニ此合戦出來、戦ノ最中敵味方ニ隔テラレ、父ハ先立テ城中ニ入りタリト心得、走り入テ見ルニ父源左衛門城中ニ不レ見。是ニ於テ二度大勢ノ中ニ切テ出デ、福井少次郎生年二十一歳ト名乗り、向フ敵ヲ追拂フ。又件ノ城ニ入テ見レバ、淺手深手二十六ヶ所マデ負ヒ遂ニ空シク成ニケリ。

たとへば元暦の昔平家一の谷の合戦に、梶原平三景時二度のかけして名を後代に残せしは、それは子を思ふ故ぞかし。是はそれに異なりて父を思ふ故なれば、恩愛の道哀成ける事ども也。さて父源左衛門陣屋へ歸て手箱を開き見れば、文共あまた書置たり。都に残り居給ひし親類の方へ、常陣のありさまを思ひに書送る。中にも母の方へは幼少の時より、なれまゐらせで不孝の至り無念なり。心ばかりはかよへども、互に見もせず見えもせず。夢のうき橋たえて後、なげかせ給はん御事こそ心にかゝり候へども、よしそれともあだし世に、のこらせ給ふ御身とて明日をも頼む道ならねば、思召分給ひ、なぐさませたまへと、こまぐと書送り、奥に一首の歌をぞ留ける。

うまれこしおや子のちきりいかなれは同しよにたにへたてはつらん

と書とどめたる有様は、兼ておもひ立し討死なりと、人みな哀におもひつゝ、涙をこそながしけれ。

タトヘバ元暦ノイニシヘ、平家一ノ谷合戦ニ、梶原平三景時二度ノ懸シテ名ヲ後代ニ殘セシモ、ソレハ子ヲ思ヒ、今ノ福井ハ父ヲ思フ。カレトイヒコレト云ヒ、時數百歳ヲ隔ツト云ヘドモ、何レモ恩愛ノ道ナレバ、誠ニアハレナリシ事ドモナリ。扱父ノ源左衛門陣所ニ歸テ手箱ヲ見ルニ、文餘多書置キタリ。披キテ見ルニ、都ニ殘ル親類共ノ方ヘ、當陣ノ有様ヲ思ヒ、ニ書送ル。中ニモ母ノ許ヘハ、幼少ヨリモ別離シ副奉ル御事モナク、心バカリハカヨヘドモ、互ニ見モシ見エモセズ。夢ノ浮橋絶テ後、ナゲカセ給ハン御事コソ心ニカ、リ侍ルヨシ、ソレトテモアダシ世ノハカナキ、ラヒニ侍レバ、何事モ前世ノ業因ト思召アキラメ給ヘト書テ、奥ニ一首ノ歌アリ。

生レコシ親子ノ契リイカナレハ同シ世ニタニヘタテハツラン

ト書止タルニコソ、兼テヨリ専ラ思ヒ定メシ討死ヨト、人皆哀レニ思ヒケル。是ヲ見テ跡ニ殘ル父源左衛門ガ心中、思ヒヤラレテ哀レナリシ事ドモナリ。

## 眞弓峠合戦の事

かくて山名又次郎俊豊は、備前國着陣の始より、但馬國親父右衛門督方へ飛脚を立らるゝことしき浪の如し。すでに敵對陣仕り日々に合戦に及ぶ。急度其國より播州へ御勢を立られ候て然るべし。いさゝかも御延引あらば、定て播磨美作牒し合すべし。左あらば美許難儀たるべき由申けれども、上意をなさざるに依て、垣屋平右衛門雜掌にてなげき申されければ、いまだ但馬國丸山の城に控へ、播磨の國へは打入玉はず、赤松兵部少輔政則方へ備前より飛脚を遣し申けるは、「敵猛勢にて三方かこみ候。播州通路取ふさぐべく候。其上阿波の大西、備後の雨宮、近日罷立風聞候。事誠ならば以外の次第也。其以前に其國の御勢を立られ、美作勢指下され、鳥取邊中郡に打て出て通路を取ふさぎ候はゞ、敵幾程かこらへべく候はんや。謀を壘中にめぐらし、勝ことを千里の外に決するにて候はんもの」と、日の内に二度三度注進しけれども、然るべき功者などもなきか、又は若武者そこの義あらんと思ひけるか、毎々政則には披露なく、只心得たると云ふばかりの返事にて、一日路二日路の間に二ヶ國の大勢ひかへながら、去年六七月より思ひまふけたる合戦に、翌年正月下旬まで一騎もはせ加へ玉はぬは、是非なき次第とつぶやく人多かりけり。

斯テ山名又次郎俊豊、備前ノ國着陣ノ日ヨリ、但馬國ニオハスル親父右衛門督ノ方ヘ飛脚ヲ立ラル、事敗波ナリ。既ニ敵ニ對陣仕リ日々及ニ合戦ニ候。急度其國ヨリ播州ヘ御勢ヲ可レ被レ指向。御延引アラバ定テ播磨美作ノ勢牒シ合セナバ、爰元難儀タルベキ由被レ申ケレドモ、上意ナラザルニ依テ、垣屋平右衛門雜掌ニテ歎キ申サンケレドモ、未但馬丸山城ニ響、播磨國ヘハ不レ打入給。赤松兵部少輔政則ガ方ヘハ、備前ヨリ敵猛勢ニテ三方圍候。定メテ播州通路可ニ取塞ニ候。其上阿波ノ大西、備後雨宮、近日罷立ノ由風聞候。事實ナラバ以外ノ次第ナリ。其以前ニ其國ノ御勢ヲ被レ立美作指下サレバ、鳥取邊中郡ニ打テ出テ通路ヲ取塞

ギ候者、敵幾程ガ可<sub>レ</sub>堪哉。回<sub>レ</sub>籌帷帳中、決<sub>レ</sub>勝於千里外<sub>一</sub>候ハン者ヲト、日ノ中ニ二三度マデ注進シケレドモ、可<sub>レ</sub>然功者ナンドモナキカ、又ハ若武者楚忽ノ義アラント思ヒケル歟、毎々政則ニハ披露ナク、只心得タルト云儀ノ返事バカリニテ、一日路二日路ノ間ニ二ヶ國ノ大勢控ヘナガラ、去年六七月ヨリ思儲ケタル合戰、翌年正月下旬マデ一騎モ馳加ラザリシハ、是非ナキ次第カナトツブヤク人モ多カリケリ。

斯テ如何なる者の異見にてかありけん、備前へは宇野下野守・浦上掃部亮を指下し、政則は十二月十六日に姫路の城を打立て、同十八日に同國大賀庄と云ふ所に着陣す。人皆仰天して、大敵備前に亂入の由日々に注進あるをさしおいて、いかなる事やあらんと申に、上意もなさず。俊豊備前に亂入の上は、本知行但馬國朝來郡打取べきと云ふ義とぞ聞えける。去程に但馬國より打入べきよし兼て聞えしかば、赤松伊達孫四郎大將にて、兩國の境に眞弓峠と云ふ所を堀切り、堀をかけ調ける所、赤松前勢眞島・上月・宇野・柏原大將にて、千五百餘騎指遣し、眞弓峠に打あがりてみれば、雪枯木をうづみて谷嶺もわかたざるほどなれば、或は風がくれ、或は日あたり、或は麓の便を尋ね陣屋を打居えたる所に、十二月二十五日の比、朝雪なれたる但馬勢、案内者を先に立て垣屋越前守大將にて二千餘騎、思よらず山かさより押よせ、関をどつと作る間、兵ども取物もとりあへず相支へ防戦ふといへども、足だまりもなくけんそなる山に、大雪はふりつもりたり、人馬の通路もあらじと油斷しける間、長良・本郷・柏原・上原左京亮・同神兵衛・布施彈正忠・松田彈正左衛門などと宗徒の者ども三十餘人、總て三百餘人討れて眞弓峠は敗れにけり。

斯テ如何ナル者ノ異見ニテカ有ケン、備前ヘハ宇野下野守・浦上掃部助ヲ指下シ、政則ハ十二月十六日姫路ノ城ヲ打出テ、同十八日同國大賀庄ト云フ所ニ着陣ス、人皆仰天シテ、大敵備前ニ亂入ノ由日々注進アルヲ聞テ、如何ナル事ヤアラント申スニ、是ハ上意ナラズ、山名又次郎俊豊、備前ニ亂入ノ上ハ、本知行但馬國朝來郡ヲ打取ルベシト云儀ゾ聞エケル。去程ニ、但馬國ヨリ打入ルベキ由兼テ聞エシカバ、赤松伊豆孫次郎大將ニテ、西國ノ境ニ眞弓峠ト云フ所ヲ掘切り、堀ヲ付ナンドシテ拵ヘケル處ニ、赤松前ノ勢眞島・上月・宇野・柏原大將ニテ、一千五百餘騎指遣ス間、眞弓峠ニ打上リテ見レバ、雪枯木ヲ埋テ谷モ嶺モ不<sub>レ</sub>分程也ケレバ、寒氣ヲ防ガントテ或ハ風陰日面ヤ、或ハ麓ノ水便ヲ尋ナンドシテ陣屋ヲ打居エタル處ニ、十二月二十五日未明ニ、

雪馴レタル但馬勢案内者ヲ先ニ立テ、垣屋越前守大將ニテ二千餘騎、思モヨラザル山カゲヨリ押寄せ、関ノ聲ヲ囁ト作ル間、赤松勢取ルモノモ取敢ヘズ支防ギ戰フト云ヘドモ、足ダマリモナキ嶮岨ナル山ニ大雪ハ降積リタリ、人馬ノ通路モアラジト油斷シケル間、各侍長良・本郷・柏原・上原左京亮・同神兵衛・布施彈正・松田彈正左衛門ナンド宗徒ノ者三十四人、惣ジテ三百餘人討レテ眞弓峠ハヤブレニケリ。

### 小倉少四郎諫言の事

赤松政則は眞弓峠の敗れしことを聞て、無念至極の次第なり。敵陣に向ひて油斷こそ未練の至なれ。時刻うつさず馳向ひ一合戦すべしとて、大賀の城を打立て節所の岩の掛路をつたひ、いそがせ玉ひけるほどに、具足武者の事なれば、いそぐとすれど行やらで、山路くらしつ夜に入間、とある谷底に陣を取居たる所に、小倉少四郎申けるは、此谷あひに御ひかへ候はんに、敵山かさより押來らば唯以前の二の舞なるべし。是にて御合戦しそんじらば、姫路の城も何の曲あるべき。只御引退有てこそ姫路の城に御籠りあらば、たとへ敵大勢にて勝に乗とも何の子細か候べき、其上雪なれざる者ども不案内の深山なれば、人馬の通路たやすからず。國中の廣みへ敵をそびき出し、要害に引かけて戦なば、一定打勝候はんものと、心底をふるひ詞をつくし教訓しければ、力およびさすらばとて、夜半計に打立て取退べしと宣へば、某先陣に打立て誰はしつはらひなんと云し者共、いとゞ先陣にはせぬけて馬物具を捨て散々に成にければ、わづかの無勢にて姫路の城にぞ籠られける。

政則此由ヲ聞テ、無念ノ次第ナリ。敵陣ニ取向ヒ油斷スルトハ未練ノ至リナリト大ニ怒リ、時刻ヲ不レ移馳向一合戦スベシトテ、大賀ノ陣ヲ立テ節所ノ岩ノ懸道ヲ傳ヒ行ク程ニ、具足武者ノ事ナレバ、急ガントスレド行ヤラデ、夜ニ入りケル間、兎ノル谷底ニ陣屋ヲ居エタル所ニ、小倉少四郎申ケルハ、此谷合ニ御控候ハシニ、敵山ノカサヨリ寄來フバ只以前ノ二ノ舞ナルベシ。是ニテ御合戦被レ成損ジナバ、姫路ノ城モ何曲候ベキ。只御引退有テ御誘置レタル城ニ御籠アラバ、縦ヒ大勢ニテ敵勝ニ乗ジ候トモ、何ノ子細カ候ベキ。其上雪馴ザル者ドモ不レ知ニ案内深山ナレバコソ、人馬ノ通路タヤスカラズ候ヘ。國中ノ廣ミヘ敵ヲ

放出シ、要害ニ引懸テ合戦シ給フニ於テハ、一定味方打勝チ候ハン者ヲト、心底ヲ盡シ教諫シケレバ、政則モ最ト同意シ、サラバ打立ツベシトテ、夜半計ニ陣屋ヲ立可ニ取除、某ハ先陣ニ打チ、誰ハ殿セヨナンド、云付タル者、イトド先陣ニ馳抜テ、馬物具ヲ捨テ散々ニ成リケレバ、政則僅ノ無勢ニテ姫路ノ城ニゾ被<sub>レ</sub>籠ケル。

されば兵に血氣仁義の二勇あり。血氣の勇者と云ふは凱軍の時かちいくさは陣を破り、敵を亡すこと數ケ度なりといへ共、負軍の時は進退度を失ひ後代の名を耻す、未練の働きをするなり。仁義の勇者と云ふは千騎か一騎になれ共さらには是を事ともせず、敵の猛勢にもおそれず逃れぬ所を知つて命を輕んずるなり。彼赤松勢は加賀南方名譽、攝州猪取野、岩倉山、山崎、洛中に於て、毎度の合戦に名を揚げ、天下に比類なかりしに、今度は主を捨て親を捨て、さしも強敵もなきに無手に逃げるは、以前は血氣にほこりけるかとぞ云はれける。去程に備前の加勢に指下しける宇野下野守浦上掃部亮も、片上と云ふ所まで下着しけるが、此合戦を聞て取て返し上る間城中色を失といへ共、さすが軍によわる氣色はなかりけり。然る間美作勢も後詰の爲に、小瀬彈正忠・大河原彈正左衛門大將にて一千餘騎、備前と美作の境なる大松と云ふ所に陣取る間、松田惣右衛門大將にて金川城三百餘騎にてたて籠る。新田庄の野伏引具して寄よとて、明石六郎兵衛日笠和氣の村に陣取る間、松田孫四郎・佐藤式部・並、檜原・堤上・小野田相催し、吉岡の南の山に陣取り、長船右京亮が館の古城取持て、播州通路をふさぐべきよし聞えける間、浦上豊前守熊山に陣取り、大かぶり焼て居たりけり。

サレバ血氣ノ勇者仁義ノ勇者トテ二品アリ。血氣ノ勇者ト云ハ、勝軍ノトキハ陣ヲ破テ敵ヲ亡ス事數ケ度アリト云ヘドモ、負軍ノ時進退度ヲ失ヒ、後代ノ名ヲモ不<sub>レ</sub>恥未練ノ働キヲスル也。仁義ノ勇者ト云ハ、千騎ガ一騎ニナルト云ヘドモ更ニ事トモセズ敵ノ猛勢ニモ不<sub>レ</sub>臆不<sub>レ</sub>遁ヲ知テ命ヲ輕ンズル也。彼赤松勢ハ、加賀南方本ノマ譽、播州猪取野、岩倉山、山崎、洛中ニ於テ、毎度ノ合戦ニ名ヲ揚シ事天下ニ比類ナキニ、今度ハ主ヲ捨テ親ヲ指置テ、サシテ競ヒ掛ル敵モナキニ、無下ニ逃ケル事已前ノ武名ハ血氣ニ誇リケルガトゾ云ケル。去程ニ備前ノ加勢ニ指下ル宇野下野守・浦上掃部助モ、片上ト云フ所マデ下着シケルガ、右ノ合戦ヲ聞テ急ギ片上ヨリ歸リ上ル。是ニ於テ、城中ノ兵ドモ色ヲ失ヒ力ヲ落スト云ヘドモ、サスガニ軍ニ弱リタル體ハ無カリケリ。

然ル間美作ノ勢モ後詰ノ爲、小瀬彈正忠・大河原彈左衛門大將ニテ一千餘騎、備前ト美作ノ境ナル大松ト云フ所ニ陣取ル間、松田宗右衛門大將ニテ、金川城三百餘騎ニテ楯籠ル。新田庄野伏引具寄ヨトテ、明石六郎兵衛日笠和氣宿ニ陣取間、松田孫四郎・佐藤式部少輔・檜原・堤上・小野田相副へ、吉岡ノ南ノ山ニ陣取り、長船右京館古城ヲ取持テ播州通路可シ塞由聞エケル間、浦上豊前守熊山ニ陣取テ、大篝ヲ燃テ居タリケル。

### 於福岡表藥師寺次郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡

### 孫左衛門討死申合の事

既に眞弓峠の合戦赤松方利なしと聞えければ、福岡城中の兵共氣を失ひ居たりしが、十二月二十九日山陣の勢東をさして行と見えしかば、能き時節に一戦すべしとて、赤松勢打出ける山陣より少々出合ひ矢軍しける。其まゝ攻登らば然るべき合戦もあるべきに、とかく云ひ相引に退ぬ。明れば文明十六年正月二日、軍の首途祝とて大田垣三河守大將にて、酒吞て山陣より下り、一日攻て幾何かの手負死人出来、晩夕に引退く。同六日に山陣さわぐ體見えしかば、定て寄來るべし用意せよと云ふ程こそあれ、山陣の勢も麓に下り鯨波を作る間、城より出合ひ野伏ども矢軍して、互に漸く引退く所に、備後勢三百人計り外堀の河下にひかへたり。

去ル程ニ十二月二十九日、山陣勢河ヲ渡シ東ヲ指シテ行ト見エシ間、能キ時節ナリ一合戦スベシトテ赤松勢打テ出ケル。山陣ヨリ少々出合ヒ矢軍シケル。其マ、實上リナバ可シ然合戦モアルベキニ、兎角云合ヒ引退キヌ、明レベ文明十三年正月二日、軍首途祝トテ太田垣三河守大將ニテ山陣ヨリ下、一日攻テ幾バクカ手負死人被ニ射出ニ及ビ引退。六日山陣騒グ體見エシカバ、定テ寄來ルベシ用意セヨト云程コソアレ、山勢ドモ麓ニ下リ鯨波ヲ作りケル間、城ヨリ出合フ野伏ドモ矢軍シケル。互ニ漸々引退ク所ニ、備後勢三百人許リ、外堀ノ河下ニ控エタリ。

藥師寺四郎左衛門、敵此攻口へは來らざるにより、今迄相戦はざる事無念とおもふ時節なれば、をめきさげんてかゝりける。暫くこらへて見えしが、大勢にまくり立られ堀の向に颯と引く所、和智左衛門、何國まで引くぞ只討死

せよと云ふまゝに、眞先に進み出て切渡る間、我劣らじと切かゝれば、赤松勢引退く所、薬師寺四郎左衛門貴能白柄の長刀取なほし、勇み進みて切かゝる間、山名勢引色に見えける所、大田美作入道・和氣筑前守・山内新左衛門何れも劣らぬ兵なるが、長刀くき短かに取て、逸足馬に乗つれ馳廻りく下知しけるは、備後國を打立しよりかばねは原上の苔にさらし、名は後代に残すべきと存するゆえ、二度本國にかへるべきと思はねば、一足も引な只討死せよと呼んで、眞前まきに進みて切掛る間、和氣筑前守・三好和泉守よに我前まへにと争ひしかば、大勢に切立られ赤松勢ひた引に引く所、薬師寺四郎左衛門大音聲にて、きたなし人々後日の名をば思ぬか、何のために命を惜むべき。貴能に於ては討死するぞ、とよばゝりて、取て返しくこゝを先途と戦ふを見て、薬師寺の延命寺、薬師寺の彌四郎は貴能を討たせじと敵きびしく追かくれども、一度に取て返しあとをさへぎれば、撥とをめて追拂ひ、津坂の山の麓より城の堀ぎはまで、二三千人の敵兵を唯十五人にて追つ返しつ戦ひしは、誠に一騎當千とは是等の事にてあるべし。

薬師寺四郎左衛門敵是攻口へ懸ケルニ寄來ラザルニ依テ、今マデ合戦セザル事無念ナリト思フ時節ナレバ、呼叫ンデ掛リケルニ且堪ヘテ見エシガ、大勢ニ捲リ立ラレ堀ノ向ニ颯ト引ク處ニ、和智左衛門、何國マデ引ゾ、只切死ニセヨト云儘ニ、眞先ニ進デ切渡ス間、我劣ラジト切掛リケレバ、赤松勢引退處ニ、薬師寺四郎左衛門貴能、白柄ノ長刀取直シ勇ミ進デ切テ懸ル間、又山名勢引色ニ見エケル處ニ、太田垣美作入道・和氣筑前守・山田新左衛門何レモ不劣兵ナルガ、長刀莖短ニ探リ、逸足馬ニ乘連テ馳廻々々下知シケレバ、備後國ヲ打立シヨリ屍ハ曝ニ原上苔名ハ後代ニ殘サント存ズル上ハ、再ビ生テ本國ニ可歸ト思ハヌゾ。一足モ引ナ只切死セヨト呼デ眞前ニ進テ切掛ル間、和氣筑前守三言和泉守互ニ我先ニ諍テ大勢掛ル間、赤松勢ヒタ引ニ引ク處ニ、薬師寺四郎左衛門大音聲ニテ、キタナシ人々、命ヲ何ノ爲ニカ惜ムベキ。夫レ命ハ義ニ依テ輕シト云ヘリ。後日名ヲバ不レ思乎、貴能ニ於テ一足モ不レ引打死スルゾト喚テ、取テカヘシく爰ヲ先途ト戦ヒケル。是ヲ見テ薬師寺彌四郎貴能ヲ討セジト、敵手繁ク追懸レバ一度ニ取テ返シ、跡ヲ遮レバドント喚テ追拂ヒ、津坂山ノ麓ヨリ城ノ堀ギハ迄、二三千人ノ敵僅四五人ニテ追ツ返シツ戦ヒシハ、誠に一騎當千ノ兵トゾ見エシ。

斯りける所に、福屋九郎右衛門と名乗て、黒革摺の腹巻に大鍬形打たる甲かぶせの緒をしめ、六尺計なる太刀の鍔もと

迄血にそみたるを持って開ひてかゝりける。貴能太刀にて渡り合ひ散々に戦ふ所、郎等ども落合ひ福屋終にうたれにけり。少勢を見すかしけるか、勝れたる剛の者が餘り味方に進出て討死しけると見えにけるを、薬師寺次郎左衛門則能此由きつと見て、命は君のために軽く名は家の爲に重し。敵にうしろを見せたらんは末代までの不覺也。貴能深入するぞ討すな者ども、返せ〜と呼ばゝりける間、額田十郎左衛門・片岡孫左衛門三人一所に戦ひ、同じ枕に討死す。

新リケル所ニ、福屋九郎右衛門ト名乗テ、黒皮絨ノ腹巻ニ、大鍬形打タル胄ノ緒ヲシメ、六尺計リナル太刀ノ鏢本マデ血ニ染メタルヲ持テ開テ懸ル。貴能長刀ニテ渡シ合ヒ散々ニ戦フ處ニ、貴能ノ郎等ドモ落合テ遂ニ福屋ヲ討取ケリ。少勢ヲ見スカシケル歟、自己ノ勇力ニツノリケル歟、アマリニ味方ヲ離レ進ミ出テ死シケルトゾ見エケル。薬師寺次郎左衛門尉則能叱トテ見テ、命ハ君ノ爲ニ輕シ名ハ家ノ爲ニ重シ。敵ニ後ヲ見セタランハ末代迄ノ不覺ナリ。貴能討スナ返セ〜ト呼ハリケル。額田十郎左衛門片岡孫左衛門三人一所ニ戦ヒ、則能ト同ジ枕ニ討死ス。

されば此三人契約の仔細あり。とある所に寄合則能申けるやうは、つらく此合戦の趣を案ずるに、味方一定打負んと覺ゆる也。其故は彼松田は當國に於ては才ある者也、將又當方と山名方とまさしく覺悟ある事なり。然る上は、播磨美作勢馳加らば、即時に楯の下にて一戦の中に勝負を決すべき所に、去年八月より當城を構へ大敵にとり籠られ、難儀の由注進するに加勢一騎も下されず、剩さへ眞弓峠の合戦にかけ負てさんぐに成り、わずかの勢にて姫路の城に籠らるゝ由申間、是非なき次第と思ふ也。さあらんに於ては一定討死すべき身の人々、よわり果なん有様共を見んも物うかるべし。逆も死なん命、一番に討死して名を後代に残し、先祖の忠功をもあらはすべし。人々いかにと云ひければ、額田十郎左衛門も片岡孫左衛門も一同に申けるは、誰しもここぞ存ずれ。相かまへて互に見はなつな見はなたじと、かたく云ひ定けるを、餘人は誰も知らざれど、今思ひ合すれば則能其所を出るとて申けるは、只今敵の手に渡るべき顔也。最後の對面せんとて鏡に向ひ、につこと笑て出し。今思ひ合すれば、誠自身の最後の見參にて有けるよな。

サソバ、彼三人兼テ契約ノ子細アリ。此度或所ニテ此輩寄合雜談シケルニ、則能申シケルハ、倩此合戦ヲ案ズルニ、味方一定打負ント覺ユルナリ。其故ハ、彼松田一家ハ當國ヲ不<sub>レ</sub>出者共ナリ。將又當國方ト合戦正敷覺悟ナリ。然ル上ハ、播磨美作勢即時ニ差下シ、二戰ヲ遂ゲ勝負ヲ決スベキノ所ニ、去年八月ヨリ當城ヲ構ヘ、大敵ニ取籠ラレ難儀ニ及ブ由數十度注進ス。然ルニ、今ニ至ル迄加勢ノ一騎モ指下サレズ、剩サヘ眞弓峠ノ合戦ニ不覺ノ負ヲ取リ散々討ナサレ、僅ナル勢ニテ姫路城ニ被<sub>レ</sub>籠由是非ナキ次第也。彼レヲ以テ是ヲ思フニ、今ノ如クナラバ一度ハ討死スベキ身ナリ。トテモ死スベキ身ノ、弱リナン形粧ヲ人々ニ見センモ物憂カルベシ。必竟死ナン命ヲ一番ニ討死シテ名ヲ後代ニ殘シ、先祖ノ忠孝ヲモ顯ハスベシト云ケレバ、兩人ノ輩モ、誰々モサコソト存知仕ル事ニテ候ヘ。相構ヘテ、此度見放サジト堅ク云ヒ定テケリ。サレバ則能其期ニ陣所ヲ出ルト云ケルハ、只今敵ノ手ニ渡ル<sup>饋</sup>也。イデ最期ノ對面セントテ、鏡ニ向テ打笑テ云ケルガ、後ニ思ヒ合ハスレバ、誠ニ是ゾ自身ノ最期ノ見參ニテアリケル。

額田十郎左衛門岡本筑後守に向ひ云ひけるは、又三郎一子也。我と一所にあらば必死を遂ぐべし。頼よし云て別の構に置かれける。片岡孫左衛門下人に向て云ひけるは、頸は敵にとらすべし。是をしるしに尋ねよと、紙よりにて左の二の腕を二重結ばせけるとなり。されば云ひしにかはらず三人ながら討死せり。親子兄弟さへ合戦のならひ、敵味方に隔られ前後相違ひ、心に任せざるものぞかし。況や同朋輩のさざと云ひ合せしをちがへず、討死せし心ざし有難かりし振廻也。

額田十郎左衛門岡本筑後守ニ向テ云ケルハ、又三郎事我等一子也。一所ニアラバ愚息モ必死スベシ。父子一所ニ戦死シテ、永ク我家斷絶セン事モ本意ナシ。和君ノ賢慮ヲ頼ミ奉ルト云ケレバ、岡本諾シテ又三郎ヲバ別構ニ指置ケル。是ニ依テコソ此度死セザリケリ。片岡孫左衛門下人ニ向ツテ云ケルハ、我討死セバ頸ハ敵ニ取ラルベシ。是ヲ記<sup>印</sup>ニセヨト云テ、紙ヨリニテ左ノ二ノ腕ヲ二重ニ結バセケル。云シニカハラズ、死骸<sup>死骸</sup>ヲ取サレバ、親子兄弟スラ合戦ノ習ヒニテ敵味方ニ隔ラレ、前後相違シ心ニ任セザル物ゾカシ。況ヤ同傍輩ノサゾト云ヒ合セシヲ不<sub>レ</sub>違、討死セシ志有難カリシ振舞ナリ。

\* 私ニ云、此薬師寺ハ彼「取レバウシトラネバ」ト詠ジテ高師直諫言シテ出家シタル、薬師寺次郎左衛門尉公能ガ後胤ナリ。代々中國ニ住シ、近キ頃ハ赤松ノ旗下トナツテ、此下知ヲ守リ播州ニ住居スト云々。

## 福岡合戦

同日午の刻の終計りに、いと霞たる春の日に、人馬の烟立やまず互に息をなだめけるが、江田・滑良・板倉は堀水の上を渡り中をさへぎらんと切掛る所に、櫛橋豊後守・則光伊豆守黒糸絨の腹巻同毛の五枚甲の緒をしめ、白猩猩を付て着、二間渡りの鎧を引そばめひかへたる所に、大勢にまくり立られ手の者ども一度に颯と引ける所に、則光伊豆守は一足も退かず大音聲に申ける。きたなし者ども、同朋輩と云ひながら我等は播磨の者也。當國の人々味方ながら耻入たり。其上山名勢は元來願ふ所の敵なり。本望の合戦して討死せよとよばりけるに、櫛橋彌五郎思はざるに引立られ少し退しが、是を聞て取て返し弓手の脇にひかへたり。かゝりける所に、三吉左京亮・滑良四郎太郎・福田九郎右衛門と名乗て、大勢の中より進み出切掛る。滑良四郎太郎と櫛橋豊後守渡り合ふ。

加様ニ戦フ所、江田・滑良・板倉堀ノ水上ヲ渡シ、中ヲ切掛ル處ニ、櫛橋豊後守、則光伊豆守、黒皮威ノ腹巻、同毛ノ五枚冑ヲ猪頭ニ着、忍ノ緒ヲ縮メ白猩猩本ノマヲアリテ着、二間渡ノ鎧ヲ引キツバメ控ヘタル處ニ、大勢ニ捲リ立ラレ、手者ドモ颯ト引ケルニ、則光伊豆守一足モ不レ退大音聲ニテ云ケルハ、キタナキ者ドモノ分野わりま哉、同傍輩ト云ナガニ我等ハ播磨ノ者ナリ。當國人味方ナガラモ耻入リタリ。其上山名勢ハ元來當手望ム所ノ敵ナリ。我人本望ノ合戦ナルゾ。唯混専カヲ勇戦シ討死セヨト喚リケルニ、櫛橋彌五郎思ハズモ引立ラレテ、少シ退キシガ是ヲ聞キ取テ返し、弓手ノ脇ニ控エタル處ニ、三吉左京亮・滑良四郎太郎・福田九郎右衛門ト名乗テ、大勢ノ中ヨリ進出テ切テ掛リ、滑良四郎太郎ト櫛橋豊後守ニ渡シ合ス。

滑良は力まさりの若武者也。大太刀にて横打に討所に、鎧にて込けるが、太刀の打はづしに左の二の腕をたてさまに切さかれ、あやうく見ゆる所に、彌五郎其外郎筆共落合ひ滑良は終に討れにけり。三吉左京亮は大村彌五郎と渡合ひ、さんぐに戦ひ鎧を目貫もとより打をられ、甲の鉢を二太刀打たれ、すでに大村討ると見えしを、難波四郎左衛門中指にて内甲を射ければ、痛手にてひざまづき鎧を切拂ひ終に大村に頸を取られけり。あつばれ剛の者也と敵味方譽めあへり。福田九郎左衛門志方彌六頸を取り、かやうに爰を先途と戦ふとも、山名勢次第に跡よりつゞき

て、引は一騎もなかりし間、難儀なりしと思ふ所に、浦上與左衛門子息與三、手勢三百人ばかりにて大勢の中に切て入り、黒烟たて、攻戦ひ、互に勇み進みて數刻もみ合ければ、屍は原上の塚に埋み、血は大河の紅波となれり。只命を限と戦し敵味方の有様、無慙なりと云ふも中々愚なり。例令ば漢の魯陽鎗を取て、夕日を招き返し合戦せしも、かくやと思ふ計り也。

滑良サシモノ若武者也。大太刀ヲ眞向ニサシカザシテ横打ニ打ツ所ヲ、櫛橋鎗ニテ込ケルガ、太刀ノ打ハツシニ左ノ二ノ腕ヲ堅ザマニ切ラレ、既ニ豊後守危ク見エケル所ニ、櫛橋彌五郎ヲ始メ、其外郎等ドモ落合テ滑良ハ遂ニ討レニケリ。三吉左京亮ハ大村彌五郎ト渡シ合セ散々ニ戦ヒ、三吉ガ持所ノ鎗目貫穴ノ本ヨリ切折ラレ、冑ノ鉢ヲシタ、カニ二太刀切ラレ、スハヤ大村ニ討ル、ト見エケル處ニ、難波四郎左衛門中指取テ引キ固メテヒヤウト放ツ。其矢三吉ガ内冑ニ中ル。袖手ナレバ立テ働ク事モ叶ヒ難ク、踏テ勇猛ヲフルレ鎗ヲ切拂フ。然レドモ、重手ナレバ遂ニ大村ニ頭ヲ取ラレニケリ。アツバレ大剛ノ兵哉ト、敵味方トモニ稱歎スト云ヘリ。福田九郎左衛門志方彌六首ヲ取ル。加様ニ爰ヲ先途ト戦ヘドモ、山名ハ彌跡ヨリ續テ引バ、殘ル味方一騎モナカリケレバ、イトド難儀ニ見エシ處ニ、浦上與三左衛門子息與三郎、手勢三百ばかりニテ大勢ノ中ニ切テ入り、黒煙ヲ立テ、責戦ヒ、互ヒニ勇ミ進テ數刻揉合ケレバ、組デ落首ヲトルモアリ取ラレ、モアリ、親ハ子ヲ捨テ子ハ親ヲ不助。手負死人ヲフミ越エ、命ヲ限りニ戦ヘバ、屍ハ原上ノ塚ニ積ミ、血ハ則河トナツテ紅波漲リ落ル有様、無慙ト云モオロソカナリ。傳聞ク保元平治ノ合戦、壽永元曆ノ戦モ、元弘建武ノ戦鬪モ、此程ハゲシキ軍ハアルベカラズ。タトヘバ漢ノ魯陽鎗ヲ取テ日ヲ招キ返セシ合戦モ、斯クバカリニヤト思ヒヤル、計ナリ。

かゝりける所に松田勢とおぼしき勢、河原面より楯のはしをたゝいて、関をつくりをめき叫で掛りけるを、浦上紀三郎討死するぞと云ひ捨て切て出る所に、同伯耆守むずと取付申けるは、合戦は是にかぎるべからず。粗忽の討死なりと堅く制し出さざりければ、力およばず留りし所に、紀三郎則國が郎等に内山彌三郎・下山彈正とて精兵あり。進出て申けるは、松田惣右衛門と矢印書で最前より味方ども射られたり。只今相近づき見ゆれば一矢仕り見候はんと、兩人楯の陰より指詰引詰さんゝに射伏て見えける所、松田惣右衛門親秀中指にてよつ引て射、下山彈正

が胸板にあたつて押付に箭先の出る程見えけるが、動と倒れて死にけり。内山彌五郎は惣右衛門が射る矢、向袖の脇引はづれへぬひさまに通れば、二の矢にて内山を射、草摺の胴付をづばと通しければ、漸とりのけありしが、幾程もなく果にけり。あまりに戦つかれければ互に相引に引てける。互に勝負は見えざりしか共、城中の勢どもは残りすくなく成行て、危くこそは覺えけれ。

掛リケル處ニ松田勢ト覺シクテ、河原面ヨリ楯ノ端ヲタ、キテ闕ヲ作り號叫テ懸リケル。是ヲ見テ浦上紀三郎、唯今討死シテ各ノ見參ニ入ルベシト云捨テ、無ニ無ニ切テ出ル。然ル所ニ浦上伯耆守是ヲ見テ、紀三郎ガ鎧ノ袖ヲ無手ト取テ申ケルハ、合戦コレニカギルベカラズ。楚忽ノ討死豈大將ノ本意トセジ。大ニ無益ナリト堅ク制シテ出サザリケレバ、紀三郎モ力不、及止ル處ニ、則國ガ郎等ニ内山彌五郎。下山彈正ト云フ、精兵ノ譽レヲ取シ者アリ。此二人紀三郎ガ前ニ出テ申シケルハ、松田惣右衛門尉ト矢記書テ、最前ヨリ味方ノ兵數多亡命仕候事無念ニ存候。只今相近ニ見エ候間一矢仕テ見ントテ、内山下山二人トモニ一枚楯ノ影ヨリ指詰引詰散々ニ射、敵人多ク射伏テ弓勢ヲ顯ハセリ。懸ル處ニ、惣右衛門尉親秀此ヲ見、ニクキ奴バラガ荒言哉、イデ手並ノ程ヲ見セントテ、中指取テ打番ヒ、ヨツ引テヒヤウト放ツ。此矢アヤマタズ下山彈正ガ胸板ニグサト中リ、押付ニ矢尻ノ出ル程ニ見エケレバ、動ト斃テ一言モ吐ズ死ニケリ。内山彌五郎惣右衛門射ル弓ニテ、射向ノ袖ヲ脇引外へ縫様ニ通シケレバ、二ノ矢ニテ内山ヲ射、草摺胴付ヲヅバト達シケレバ、漸次取除ケルガ、幾程無クゾ死シタリケリ。アマリニ合戦ニ屈シ氣ヲ疲シケレバ、相曳ニ引退キケル。

### 浦上美作宗則下向の事附雜説

浦上一黨申されけるは、此方にては軍勢いつ散ずべきとも見えず。さらば浦上美作守所司代にていまだ在京しける間、呼下し一合戦すべしとて飛脚を以て注進しける。美作守則宗は正月中旬都を立て、東播磨に下着の由申ける程に、城中の兵共氣色をなほす所に、則宗東條と云ふ所に着て、尸前眞弓峠の合戦に、無下に逃たりし者共にまで言を加へける間、程なく馳付ける。姫路の城に籠たる者共まで、赤松が一族は宇野下野守籠たる高田の城に加る、諸士

は浦上に馳付て政則に従ふ者とは、宇野刑部少輔・小倉肥前守・子息少四郎・薬師寺彦四郎などばかりにて、随分頼切て情をかけし者ども散りくゞに落行ければ、廻り一里に餘たる城の中にわずかの勢にて、いづくを相抱へしとも見えざりけるに、剩へ何者か云ひ出しけん、下野も浦上も在田廣岡同心してけりと聞えければ、敵と云ひ鬨と云ひ合戦はいかで叶ふべき、先々引退き重て上意をうかぢひ、勢を付てこそ合戦あるべく候へ。只討死あつては智謀なきに似たるべしと再三異見しける間、力なく正月二十二日城を落て、攝州の方へぞしのばれける。

サラベ浦上美作守所司代職ニテ、未ダ在京ナリケルヲ呼下シ合戦スベシトテ、飛脚ヲ以テ始終ノ様子ヲ注進シケル。美作守則宗是ヲ聞テ、正月中旬ニ都ヲ立テ東播磨へ下着ノ由申間、城中ノ兵ドモ疲氣ヲ散シ色ヲナホス。則宗東條ト云所へ着テ、最前眞弓峠ノ合戦ニ無下ニ逃走シタル者共マデニ言ヲ加へ、念頭ニ諸士ヲ懷ケレバ、程ナク大勢馳着ケル。姫路ノ城ニ籠リタル輩マデ、赤松一族ハ宇野下野守籠リタル高田ノ城ニ馳加ル。諸侍ハ浦上驅ニ着テ、政則ニ付副フ者トテハ、宇野刑部少輔・小倉肥前守・子息少四郎・薬師寺彦四郎ナンドバカリニテ、随分頼切テ情ヲ懸シ者ドモ、散々ニ落失ケレバ、廻り一里ニ餘タル城中ニ僅の勢ニテ何クヲ相抱ベシトモ見エザリケル。剩へ何者カ云出シケン、下野守モ浦上モ在田・廣岡同心シテ、政則ヲ亡シナント雜説出來ケル間、扱ハ敵ト云味方ト合戦叶フベカラズ。先々此所ヲ引退キテ、重テ上意ヲ伺ヒ勢ヲ付テコソ合戦アルベク候へ。只討死シテ名將僅ノ城中ニ果給ハン事、智謀ナキ事ニテコソ候へト、何レモ口ヲ揃ヘテ再三異見シケル間、政則モ力ナク正月二十二日城ヲ落テ、播州ノ方ヘッ被忍ケル。

此由備前へ告越ける間、櫛橋・薬師寺申けるは、言語同斷の次第なり。去年十一月より當城に籠り日夜の合戦に一命を輕んずるも、政則を世にあらせ申さん爲なり。況や行方しらず成給ぬる上は、向後合戦に利ありとも、誰を主と頼申べき。まづく此城をとりて、いかに政則の行衛を尋ねまゐらせて義兵を起すべしとて、ひそかに落べきやうを内談す。浦上則國此由を聞て、軍の習ひ一人も勢付ば兵いさみ、少も勢透けば氣を失ふものなり。況彼兩人取除ば、我等が手の者もつれて落行べし。さらに於ては合戦は叶まじ。只彼兩人と打違へ死より外はなしと、夜廻りと號し手の者少々引具し出ける。

此由備前へ告越スニ依テ、櫛橋・薬師寺大ニ驚テ云ケルハ、姫路ノ義言語道斷ノ次第ナリ。去年十一月ヨリ當城ニ籠リ、日夜ノ合戦ニ各一命ヲ輕ンジ忠功ヲ顯ス事モ、偏ニ政則公ヲ世アラセ、播磨美作備前ノ三國ヲ全ク保チ、當家繁昌アル様ニトノ事也。然ルニ主君行方不<sub>レ</sub>知ナリ給ヒヌル上ハ、向後誰ガ爲ニ合戦セン。タトヒ軍ニ勝利アリトモ、誰ヲ頼ミテ主君トスベキ哉。所詮此城ヲ取除テ、何ニモシテ政則公行方尋マキラセテ、再ビ義兵ヲ起スヨリ外ノ事ハアルベカラズト、密ニ可<sub>レ</sub>落ヤウヲ内談ス。則國此由ヲ聞テ、ソレ軍ノ習ヒニテ一人モ勢付時ハ兵氣勇ミ、少シモ勢減ズレバ諸卒氣ヲ失フ者也。況ヤ櫛橋・薬師寺取除クニ於テハ、我等ガ手勢マデモ連テ落行クベシ。左アラシニ於テハ合戦ハ叶フマジ。只彼兩人ト指違ヒ死ナン。是ヨリ外ノ事ハナシト怒テ夜回ト號シ、手者少々引具シ出ケルヲ、

伯耆守基景申けるは、目の前の敵をさしおいて味方軍して死たらんは、末代までの不覺なり。且は時に取ての動轉とも云べきか。死は名を思ふが故、嘲にならん事も口惜かるべしと堅く留めける間、さらば腹を切るべし。千人萬人も落ば落よ、我一人耻辱なり當城を調べし。日の始より旁々同心あらば勿論なり。しからずば一人腹を切らんと思ひ定めし覺悟、今更相違あるべからずとて、腹巻をぬぎ捨て、すでに刀に手をかけしを、基景刀にすがり申けるは、此合戦にて事散すべくば尤傷害あるべきなれども、則宗播州に下向あつて大勢を付合戦あるべきなり。志あらん士を召具し馳加りたらんは一方の合力たるべし。其上異國本朝にも、一旦落て本意を達するためにも多し。只年寄たる者申に任せられ候へるともなひ出ける程に、力なく正月二十四日の夜半計に城を出て、高田の城にぞ加りける。櫛橋・薬師寺は浦づたいに海士の小舟に便船し、主の行末を尋ね四國の方へぞ落行ける。いかなる名城も合戦のならひにて、攻落さるゝも多けれ共、角ばかりよしなき雜説にまよひ、味方とわかれて散々に成しは前代未聞の事どもなり。

伯耆守基景申シケルハ、目ノ前ノ敵ヲサシオイテ、味方ト軍シテ死シタランニハ、末代マデノ不覺ナリ。且ハ時ニ取テ動轉シタリトモ、人口ノ嘲リアルベキ歟。死スルハ名ヲ思フ故也。死シテ若シ諸人ノ嘲弄ニナラン事ハ、口惜シキ事ナルベシト堅ク制シケル間、去ラバ腹ヲ切ルベシ。千萬人モ落ヨ、我一人耻辱ナリ。當城ヲ調シ最前ヨリ殘ル旁々同心アラバ勿論也。不<sub>レ</sub>然ハ我一人

腹ヲ切ント思定シ覺悟、今更相違アルベカラズトテ、腹卷ヲ脱除キ既ニ腹ヲ切ントスル處ヲ、基景父刀ニスガリテ申ケルハ、此合戦ニテ事散ズベクンバ勿論生害アルベケレドモ、則宗播州ニ下向有テ大勢ヲ附ケ合戦アルヘキナリ。志アラン侍共ヲ召具シ馳加リタランニハ、一方合力トナルベシ。其上異國本朝ニモ、軍ノ勝負ニ依テ一旦落テ本意ヲ達スル様シ、古今アゲテ計フベカラズ。只年老タル我等ニ被レ任候ヘ。基景アシクハ計ヒ申マジト堅ク諫言シテ、紀三郎ヲ伴ヒ出ケル程ニ、老者ノ諫メ黙止難クシテ、正月二十四日夜半バカリニ、浦上ノ一族城ヲ落テ高田ノ城ニゾ加リケル。櫛橋・藥師寺ハ、浦傳ヒニ海上ノ小船ニ便船シ主君政則ノ行末ヲ尋ネ、四國ノ方ヘゾ落行ケル。サレバ如何ナル名城モ、合戦ノ習ヒニテ攻落サル、事ハ多ケレドモ、斯バカリヨシナクモ味方ト割テ散々ニ成シハ、前代未聞ノ事ドモナリ。

(右本會に於て底本とせるものには、尙卷末に著作年月日著者氏名、及裏表紙裏面に) 轉寫の年月を附記したり。左の如し。……………編者)

永祿元年三月九日

目黒祐欣作之

貞享三年十一月十日朝染筆及成之初刻寫之畢

(此に引用對照したる刊本の部には、左記記事、及後人の増補したると覺しき附録あり。左の如し。)

右作者不知如寫本。

時に萬治三庚子年二月下旬書之

常林坊

判ニ常林日  
常寶トアリ

江田宗眞老

右寫本ヲ得テ元祿九年子仲秋下院之日江南隱士窓下染筆

●赤松兵部少輔政則ハ、赤松則祐律師第五世ノ孫也。則祐長男義則、義則長男ハ左京大夫滿祐入道性具ナリ。滿祐播備美ノ三州ヲ領シテ赤松一族ノ棟梁ナリ。然ルニ嘉吉年中滿祐逆心ヲ企テ、將軍義教公ヲ弑シ奉ル。此大罪ニ依テ滿祐其子教祐トモニ誅セラレテ、滿祐ガ領國播州ヲ山名右衛門督持豐ニ賜リ、美作ヲ山名教清ニ、備前ヲ山名教之ニ賜フ。是滿祐誅罰ニ軍忠アルヲ以テ



直家ノ爲ニ本國ヲ失ヒ、子孫亡ビタリ。

本書委細知レガタキ所ノミ有レ之ニ付テ、赤松・山名・松田・浦上等ノ傳記ヲ少々爰ニ加ヘ記スナリ。(私ニ云、浦上ノ末流少々今備前ニ在リト云ヘリ。)

備前文明亂記終